

2017年度木質物性研究会・木材と水研究会

合同シンポジウム実施報告

木質物性研究会代表幹事 山本浩之（名古屋大学）

木材と水代表幹事 川井安生（秋田県立大学）

2017年9月14日（木）～15日（金）の2日間、梓水苑（長野県松本市）において、木質物性研究会・木材と水研究会合同シンポジウム（協賛：日本木材加工技術協会、産総研コンソーシアム持続性木質資源工業技術研究会）を開催した。

シンポジウムテーマとして「相思相愛なのにいつもすれ違いー基礎研究と開発研究」を掲げ、大学・試験機関・企業で活躍中の6名の講師の方々から、ご自身のこれまでの研究や技術指導または開発研究における経験、現在の興味や将来の課題、他分野の研究者や現場への要望について、話題を提供して頂いた。2日間にわたる講演の最後は、木質物性科学および木材乾燥工学の分野で長年指導的立場にあった碩学2名をお招きし、これまでのご自身の研究経験を参考に、シンポジウムの総括をして頂いた。つづいて、講師や来場者も交えて総合討論が行われた。なお、1日目の夜の懇親会後には、「大学院生や若手研究者を中心とする討論会」が行われ、12名の学生発表者と様々な研究分野の専門家の間で熱い議論が交わされた。

以下、講演題目（講師）を紹介する。

講演1 最新の木材構造設計（京都大学生存圏研究所 五十田 博氏）

講演2 伝統木造の実務と材料特性（清水建設株式会社 貞広 修氏）

講演3 木材乾燥技術と基礎研究（森林総合研究所 小林 功氏）

講演4 基礎研究と開発研究（セブン工業株式会社 田島宣浩氏）

講演5 実学につながる木材物性の基礎-樹を知り木を活かす-（京都府立大学大学院 神代 圭輔氏）

講演6 木材の湿熱回復（名古屋大学大学院 松尾 美幸氏）

総合討論 碩学1 元森林総合研究所 久田 卓興氏、

碩学2 静岡大学名誉教授 祖父江 信夫氏

総合討論においては、碩学から「設計に携わる人であっても、木材を扱う人は、リグニンやセルロースマイクロフィブリルまで知っておくべきと考えるか？木材の物性や材質研究に対する要望は？」という質問があった。これに対して講師からは以下のような回答があった。

「現場の構造設計担当者が木材の細胞や分子まで知っておく必要性は感じないが、学問側の方は、材料開発や使い方を考えるうえで、知って学んでおくべきだと思った。」「古い木材の強度がどのように変わっていくかについては興味がある。1000年くらい経ったときに、剛性は落ちていないか？教科書のようにまとめて書いてあると嬉しい。」

司会者から「基礎研究と応用研究ではスタート地点が異なる。大から小、小から大、スケールはどこからスタートするべきと考えるか？」という質問があった。これに対して講師から

は「物性研究の基礎の分野は、辞書のようなものがないかなと思う。いろんなスケールでこんなことがわかるという辞書をつくりたい」という意見があった。

今回のシンポジウムは宿泊施設の都合上 59 名（うち学生 18 名）の方々に参加頂いた。講師の方々からは、本音を交えながらご講演や討論をして頂くことができ、本来は相思相愛であるはずの「木材物性論」、「木材乾燥工学」、「木造建築」の 3 つの分野が意思疎通できていない原因を、参加者ともどもそれぞれの立場から考えることができた。今回の合同シンポジウムを契機に、これらの研究分野がこれまで以上に歩み寄り、今後さらに活発な議論が進んでいくことを期待したい (http://www.jwrs.org/kenkyu/physical_p/)。

なお、本報告は、木質物性研究会幹事の一人である三好由華氏（森林総合研究所）による記録に基づいた。詳細については同氏による紹介記事（木材工業第 73 巻第 1 号－2018 年 1 月）を参照されたい。